

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一、次の文章を読んで、その問いに答えなさい。

『指輪物語』は、多様な者たちが、ある一つのルールによってすべてが縛られてしまう世界に反抗して、その指輪を捨てて行く物語なのである。

なんといっても、旅の目的が「何かを得ること」「じやなくて「何かをあきらめること」「捨てること」というのが①カツキ的、従来の冒険物語にはなかったエポックメイキングな発想だったと思います。「指輪を捨てる」というのは、多文化の中で、己の②リョウブンをだけをかたくなに守ろうとする考えを捨てること、時にはあきらめたり、譲ったりしながら、自らも変容して、互いの壁を乗り越えていこうとすることでもあるのでしよう。

A 何かを「守ること」は、いかにもいいことのように賞賛されます。反対に「あきらめること」「捨てること」は批判の対象にされがちですが、はたしてそうでしょうか。

たとえば、近ごろB「わたし的には」という言葉が流行っています。私は、あの言葉がとても気に入ります。「わたし的には」という言葉が意味しているのはつまり「わたしの考えていることは、あなたの考えていることとは違うと思いますが」と、先回りして前置きしているわけです。

言葉のあたりが柔らかいせいで相手に対する配慮のような感じがするけれど、じつのところは「わたしはわたし」「あなたはあなた」と、あらかじめ一線を引いて、自分と他者を切り離そうとしている、というところもある。それをあらかじめ言われてしまうと、返す言葉も限定されてしまいます。

「わたし的には」と口にするとき、人は、おそらく他者からの否定も、肯定も、求めていないのでしよう。違いを認めたくなくて、お互いをわかり合おうとする意図もあるのかもしれませんが、でも、自分が人と違っていることで傷つきたくないの、違いがあるのだからかまわないでほしい、放っておいてほしいと、あらかじめ距離をとってしまう、それが「わたし的には」という言葉に表れているような気がするのだ。

それぞれの価値を尊重した結果、埋めたい溝が、溝のまま、放置されてしまう。それは、文化人類学で、「相対主義の罠」といわれていたものに似ている気がする。

アメリカにはアメリカの文化があり、ヨーロッパにはヨーロッパの文化があり、日本には日本の文化があつて、それぞれに固有の価値観があるのだから、批判してはならないということは、とても大切な大前提ではあるのですが、その結果、ひとつひとつがバラバラのモザイクのように散らばって、わかり合えないことはわかり合えないままということが起こってくるわけです。

文化や伝統は守るべきもの、尊重すべきものという考えかたを否定するつもりはありませんが、相手の中によいところを見つけたら「自分の持っているものより、こっちのほうがいいような気がする」と思

二、次の文章を読んで、その問いに答えなさい。

* 恭介は中学二年生の秋、野球部のエースピッチャーとなった。エースとして初めての試合では、順調に投げていたが、五回を過ぎたところでスタミナ切れの状態になり、相手チームにきんさん打たれて惨めな思いをした。

「野球が嫌いになったか」

グラウンドの片隅、桜の木の下でいきなり問いかけられた。一瞬、問いかけの意味が理解できなくて、

「はあ、嫌いつて？」と、間の抜けた返答をしてしまった。

「野球だよ。ほかすか打たれて、マウンド(注)で、ピッチャーが投球のために立つ所」でどうしてええかわからなくなつて、文学的な表現をすればだ、途方にくれたわけや、な」

「はあ……」

蘆守監督は国語科の教師でもあるのだ。

うことができる自由、かたくなに守らなくてもいい、捨てたつていい、どちらを選んでもいいんだよという寛容さ、それこそが、本当の自由という気がするのです。

イギリスは、かつて大英帝国の植民地政策によって、まさに「一つの指輪は、すべてを統べる(注)統治する」。(One Ring to rule them all)をやろうとした国です。よく知られているように、いまだに③ゲンカクなクラス(階級)がある国でもある。でもだからこそ、サトクリフやトールキン(注)小説家。トールキンは『指輪物語』の作者には、支配する、支配されるということに対する実感と深い洞察があつたのでしよう。

国と国との戦いなら「戦争」と言ってもらえるけれど、国を失った人、国を持たせてもらえない人がそれをする「テロリズム」と呼ばれます。

テロリズムというのは、つまり、圧倒的な力の差があるとき、それでも自分たちは間違っていないということを証明するためには、他者を壊してもかまわないという論理です。

自分たちが苦しい状況に置かれ、弱者として押しつぶされようとしている原因は、世界全体がそういうシステムになっていることにある。そうすると、世界全体が彼らの敵であつて、そのシステムの恩恵で生きている以上、たとえC生まればかりの赤ちゃんでも責任はあるのだから、無差別の暴力によって④ボウフクしてもよいのだという考えかたであるように思います。

(a) 時として、この世界は、強い者に有利な、ひとつの巨大なシステムとして⑤キノウしているように思えてきます。

(b) だからといって、恐怖を武器にして人を殺すことで、自分の正当性を証明しようとする考えかたは、やはり、どこが大きく間違っています。

(c) 日本が「お国のために」と戦争に突き進んでいったように、何かを守ろうとすることは、時に他者を破壊することをよしとしてしまふほどの強さを持ちうるのです。

(d) そこに至らない別の道、境界線を越える別のやりかたを見つけるしかない。(上橋菜穂子・瀧晴巳「物語ること、生きること」)

(講談社)

問一 ①⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 (a) (d)にあてはまる語をあとから選り記号で答えなさい。

ア さて イ しかし ウ だとしたら

エ もしかして オ かつて カ 確かに

問三 筆者が、Aのように言うのは、「あきらめること」「捨てること」にどんな意味があると考えているからでしょうか、説明しなさい。

問四 Bについて、なぜ気になるのでしょうか、説明しなさい。

問五 Cについて、なぜ責任があるというのか、また、なぜ「生まれたばかりの赤ちゃん」を例にあげているのか、合わせて説明しなさい。

「嫌なものやろ」

これには、はつきり答えられる。

「だろ。おれはピッチャーの経験はないから、偉そうなことは言えんが、まったく打てる気がしないのに、一点差で負けている試合のツアウト満塁の場面で、打席が回ってきたことがある。あれは……きつかったな」

「……ですね」

相当きついな。おれなら、膝ががくがく震えて無理やりでないと足が前に出ないかもしれない。バットを捨てて逃げ出したくなるかもしれない。

結局、打席には立たなかったがな」

「え？」

「代打を出された。そのときの監督に言われたよ。おまえの背中をみると、『何がなんでも打つ』ってオーラがまったく感じられない。怖くて打席に立たせられないってな」

「はい」

「代打を告げられてチームメイトの一人が素振りを始めたのを見て、おれは、むちゃくちゃ悔しかった。けど、ほっとしたのも確かだ」

「あ、これで代打に立たずに済むって、安堵したわけだ。安堵の意味、わかるな」

「わかります」

「けつこう。まあ、今、監督の立場で考えれば、代打を出されてほっとしている選手なんか、確かに怖くて使えんよなあ」

「自分はどうだったろう。」

恭介は考える。

降板（注）投手が交代させられることを言い渡されたとき、どうだったろう。悔しかったのか、安堵したのか。情けなかったのか、辛かったのか。

一言では上手く言い表わせない。諸々の感情が綱い交ぜ（注）いろいろなものをもあわせて一つにすることになって渦巻いていた。ぶおうぶおうと渦巻く音が聞こえたほどだ。

「だから、おまえがマウンドでどんな気持ちを感じたか、だいたい想像はつく。試合が終わったあと、どんな気持ちになったのかもな。だいたいやぞ。ピッチャーの気持ちなんて、マウンドからボールを放るやつでないと、わからんものやからな」

「はい」

「で、恭介、どうなんや？」

「はい？」

「野球が嫌いになったか？」

恭介は顎を引き、監督の顔を見つめた。精悍な（注）態度や顔つきが勇ましく、氣力に満ちあふれていることという形容がそのままではまるような日に焼けた顔だ。

「どうなんだ、恭介」

顎を引いたまま、恭介はかぶりを振った。

「いえ、嫌いじゃないです」

嘘ではなかった。建前でもない。真実だ。

減多打ちにあったピッチャーとして、試合の結果はどうあれ明らかに敗者としてマウンドを降りねばならなかった悔めさ、投げた球がこごとく打ち返される衝撃、誰も助けてくれないという恐怖と孤独、自信がはらはらと剥がれおちて行く心細さ、「野球の才能なんて、欠片もないんじゃないのか」と鋭く突き刺さる声、渦巻く感情……耐え難いほど嫌な経験だった。今でも「ア」を引いている。

「でも、止めたいとも思わない。捨ててしまおうとも、止めたいとも思わない。」

「嫌いにはなれません」

「もう一度、投げたいか」

監督を見上げたまま、恭介は頷いた。

「もう一度、投げたいです」

投げたい。

恐いけれど、やっぱりマウンドに立ちたい。

そうかと、監督も頷いた。深く首を曲げるように頷いた。それから、ふいに笑いだす。大声ではないけれど、よく響く笑い声だ。グラウンド周辺を走っていた陸上部員が振り返り、①ジュカの二人を見やった。

監督は笑い続ける。いかにも愉快そうな②ホガラカ笑いだった。

「監督……何がそんなに可笑しいんですか」

「おそろおそろ尋ねてみる。」

「いや、いいんだ。いいんだ。そうか、嫌いじゃないか。ははは。恭介、おまえたいしたもんやな。大物だぞ、大物」

太い腕が伸びて来て、バシリバシリと恭介の肩を叩いた。

「ピッチャーなんてのはな。打たれてなんぼや。打たれて打たれて、打ちのめされて、それでもマウンドから逃げなんだやつだけが、ピッチャーになれるんや。はは、そういう意味で恭介、おまえ、合格や。合格。ははははは」

バシリバシリ。

肩を叩かれる。何だか、恭介も一緒に笑いたくなる。監督の言葉を本当に理解できたとは思えないけれど、真っ直ぐに伝わってくるものがあつた。

おれ、ピッチャーなんやな。（中略）

確かにそう思う。思える。監督ほど（注）（注）笑う（哄笑）というのだと、後から教えてもらった）のはさすがに憚られるけれど、遠く霞む津雲（注）地色の山々を眺めながらにんまりと口元を緩めるぐらいはやってみたい。

恭介が口を僅かに開き、笑顔になったとたん、監督の笑い声は止んだ。

「恭介」

「はい」

「この前の試合、なぜ打たれたか、その理由を明日、提出しろ」

「え？」

「レポートだよ。箇条書きで構わん。書いてこい」

「レ、レポートですか」

田舎の中学生にすればレポートという言葉さえ「イ」になじまない。そうだ。難しく考えなくていい。何で打たれたか他人に教えてもらうんじやなくて、自分のことだ。

「監督は恭介の頭を指さした。」

「ここで考えるんだ。頭つてのは帽子をかぶるためだけにあるんやないでな」

「……はあ」

「恭介、他人に教えてもらったことつてのは、けつこう忘れやすい。いつの間にか、消えてしまっていることが多いんや。けど、自分の頭を使つて考えたことは、（b）忘れんもんや。頭に刻み込まれてるからな」

「はあ……」

「ともかく、明日までの宿題や。ちゃんとやってこい」

まさか、部活で宿題が出るとは思ってないなかつた。恭介は家に帰り、ルーズリーフを広げた。（中略）

なぜ、打たれたか。

「文字一文字、力を込めて書き込む。そして、考える。」

おれ、なんで、打たれたんやろか。

立ち上がりはいつも、調子がいい。ストライクがびしっと決まる。身体も軽くて、自由に動く。それがどの試合も申し合わせたように三回、四回あたりで連打を浴びてしまう。

どうしてだろう。原因はなんだろう。

恭介はノートを開いたまま、考え込んだ。

ものごとをじっくり考えるのは苦手だ。③セイセキはそう悪くはないけれど、勉強が好きならわけではない。

野球が上手くなるためには、ともかくひたすら練習するだけだと、それしか方法はないと信じていた。「考える」なんて作業が必要だとは思ひもしなかった。

しかし、監督は考えろと言う。考えて、レポートを書けと言うのだ。

教科の宿題ではないので、点数や順位をつけられるわけではないが、提出物となると適当にごまかすわけにはいかない。ごまかせるほど器用でもなかった。それに、野球に関する限り、恭介は真面目でいたかつた。真面目に、真摯に（注）まじめでひたむきなこと、まっすぐに関わっていたかつた。

だから、考える。

おれ、なんで、打たれたんだらう。

なんで、なんで、なんで……

考え、そして、書く。

何度もシャープペンの先が折れた。一行書いては考え、考えてはまた一行書く。

（中略）恭介は、書きあげたばかりのレポートにざっと目を通す。

自分のピッチングについて。

三、四回までは比かく調子がいい。そこから、崩れるのはどうしてか？

そこまで読んで、比かく的を消しゴムで消した。

比較的。漢字に書き換える。監督は国語の教師でもあるので、習った漢字をきっちり使わないときげんが悪くなるのだ。

「頭だつて、道具だつて、きかいだつて、使わなくちゃ錆びるだけやろが。習ったことはどんなに使う。使わないのは、自分を甘やかしている証拠やぞ。自分に甘いやつが野球に勝てるか。ええな、日記を書くくんでも、年賀状を書くくんでも、知ってる漢字はできるだけ使え。それが、回り回って野球の上達に繋がったりするんやぞ。わかるか？」

いつだったか、毎朝、行われている漢字テストのセイセキが振るわなくて、職員室に呼びだされたことがある。そこで、（c）説教された。

わかるか？ と言われても、わかりませんと答えるしかない。漢字と野球がどう繋がるのか、恭介には（d）理解できなかったからだ。今でも、できない。正直、監督先生が国語教師であり野球部監督だという立場から、無理やりこじつけたとしか思えないのだ。ただ、比較的調子がいい。

と書き直したとたん、閃くものがあった。
比較的調子が良いとき、足の④ウラにマウンドを確かに感じられるのだ。スパイクを通して、マウンドの熱や感触がまっすぐに伝わってくる。それが打たれ始めると、まるで途切れてしまう。いや、逆さまか。足ウラに何も伝わらなくなると、調子が崩れてしまうのだ。
要は足か。

恭介はマウンドで慌ててしまふとか、焦ってピッチングのリズムがくるったとか、書き連ねた部分をきれいに消した。消しゴムの音を一息に吹き飛ばす。
シャープペンをしっかりと握り、一気に書く。もう迷わない。書きたいことが込み上げてくる。込み上げてくるものを青い野線のノートに写し取っていく。

自分のピッチングについて。
三、四回までは比較的調子がいい。そこから、崩れるのはどうしてか？

マウンドが感じられなくなるからだ。調子のいいときは、自分の足でマウンドに立っていることが、わかる。自分とマウンドがつながっているんだなあと感じられる。しっかり、下から支えてもらっていると感じられる。

恭介はそこで息を一つ、吐いた。A何だか胸がどきどきする。こういうのを動悸と呼ぶのだろうか。いや、そんな病的なものじゃない。もつと心地よい、胸の高鳴りだ。自分とマウンドが繋がっている。それを確認できた。高揚感に心臓が大きく鼓動を刻む。

でも、調子が悪いとき、打たれ出したときは、そういうのを感じられない。マウンドをどこか遠くに感じてしまう。しっかり立っている気がしない。
結論。

一試合、ずっと、マウンドに立っていられるようになしつかりした足が必要だ。マウンドをずっと感じていたい。そのためには、強い足腰がいる。(中略)
つまり下半身を鍛えることが大切だと、ぼくは思いました。

読み返してみても、文章が少し子どもっぽいは感じたが、概ね満足できる。自分が大発見をしたようで、心はまだ弾み続けていた。マウンドに立っていたい。マウンドを感じていたい。一試合、投げ切りたい。自分のピッチングに自分で◎を付けてみたい。これがおれの一球なのだ、胸を張りたい。そのためには、どうしたらいいか。

恭介なりの精一杯の解答がここにある。
うん、満足だ。(中略)

蘆守監督がうーんと一声、唸る。唸ったまま黙りこむ。

恭介の差し出したレポートを覗くように見つめている。いや、本当に覗んでいるのだ。口元はへの字に結ばれ、眉間に皺が寄っている。それほど量の多いレポートに目を通してから、すでに三、四分は過ぎていた。

おれ、何かやばいこと書いたっけ。
少し、焦る。

自分としては、上手くまとまったと満足し、意気揚々とまでは言わないが、かなり自信をもって提出したレポートだった。けれど、それは、独り善がりの思い込みに過ぎなくて、監督からすれば的外れでしかなかったのかもしれない。

でも、いいや。
恭介は密かに、胸を張る。

監督がどう思おうと、これがおれなんだから。
マウンドで感じたこと。マウンドから受け取ったもの。そのマウンドに立ち続けるために、どんな努力も惜しまない決意。

みんな、自分のものだ。嘘はない。
監督が、大人がどう思おうと何を言おうと、関係ない。

恭介は挑むような心持ちで、蘆守監督の前に立っていた。
背後のグラウンドでは各運動部の練習が始まっている。野球部の部員たちもそれぞれがストレッチを終え、ランニングに移ろうとしていた。(中略)

ベンチに座っていた監督が、唐突に立ち上がる。

「恭介」
「はっ、はい」
「Bおまえ、詩人やつたんやなあ」
「シジン？」

「詩人や詩人。リルケやヴェルレーヌやランボオ、上田敏や草野心平」
「はあ……」
「どれも未知の名前だった。聞いたこともない。」

「誰ですか、それ？」
「だから、詩人なんだ。みんな、教科書に出てきた詩人やぞ。知ってるやろが」
「知りません」

恭介は正直に答える。どの学年でも教科書の最初に詩が載っていたのは覚えがある。けれど、それがどんな内容だったのか、作者が誰だったのかほとんど記憶にない。まるで興味を持っていなかったのだ。「情けない。東西の代表的詩人の名前ぐらい知っとけや。学力ちゅうより⑤キョウヨウの範囲やぞ」

「はあ……でも、監督」
「なんや」
「詩人と野球が関係あるんですか」
「僅かの関わりもないように思える。」

「おおありだ。感性の問題やからな。感性の鈍いやつに詩は創れんし、野球はできん。わかるか？」
漢字の次は詩人か。どうして、うちの監督は何でもかんでも野球に結びつけたがるんだらうか。

「いや……どうも、よくわかりません」
「マウンドが感じられなくなるからだ。調子のいいときは、自分の足でマウンドに立っていることが、わかる。自分とマウンドがつながっているんだなあと感じる。しっかり、下から支えてもらっていると感じられる」

監督がレポートを読み始めた。読書の他にカラオケが趣味だという声は、よく響き、恭介を慌てさせる。
「かつ監督、何するんですか。そんな大声で読み上げたりせんてくさい」

「詩だ。このマウンドの捉え方はまさに、一編の詩だ。恭介、おれはおまえを見直したぞ」
「はあ……」

「こういう感覚、マウンドとの一体感を知ってこそピッチャーなんだ。詩人であり、ピッチャー。うーん、まさに理想だな。恭介」
「はあ……」

「しかも、ちゃんと、弱点の克服法まで自分で導き出した。いや、実に見事だ」
「はあ……」

「走り込め」
監督の声が低く太くなる。

「おまえのレポートの通りや。走り込んで下半身を鍛えろ。自分の足でしっかりとマウンドを踏みしめや。そうすれば、マウンドがおまえを支えてくれるで」
「はい」

大きく頷く。監督の言うことがやっとなり、理解できた。恭介が理解できることをやっとなり言ってくれた。何となく安堵する。

「おまえがどんなピッチャーになるか、えらい楽しみやぞ」
蘆守監督は恭介を見下ろしたまま、真顔で言った。

その日から、恭介は毎朝五キロの道程を走った。
(あさのあつこ『かんかん橋を渡ったら』)

問一 ①⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

送り仮名がある場合は、それも含めて書きなさい。

問二 ア・イ にあてはまる語を入れなさい。いずれも、漢字一字です。

問三 (a)(d)にあてはまる語をあとから選り記号で答えなさい。

ア さっぱり イ とつくに ウ こんこんと

エ めったに オ とうとうと カ 高らかに

問四 Aは、どんな気持ちですか。また、なぜこのようになったのでしょうか。説明しなさい。

問五 Bとありますが、監督がこのように言う理由を二百字以内でくわしく説明しなさい。

には記入しないこと。

問五		問四		問三		問二		問一	
						a b c d		④	①
								⑤	②
								③	

問五										問四		問三		問二		問一	
										a	b	c	d	ア	イ	①	②
																③	④
																⑤	

200